

1. 科目名 (単位数)	生涯発達心理学特論 (2 単位)	3. 科目番号	EDMP5341 EDMP5327
2. 授業担当教員	石垣 久美子		
4. 授業形態	講義・教科書・文献を読み理解し、自分の考えをまとめ発表する。	5. 開講学期	春期
6. 履修条件・他科目との関係	心理学概論・発達心理学・学習心理学を学んでいることを必須とする。また、日本語で記載された専門的な文献を読むための日本語能力を必須とする。		
7. 講義概要	現在目の前の対象の発達に対して、現在の状態からだけではなく、受胎から死までのスパンの中で、支援や状態像を検討するために必要な知識を身につけていく。		
8. 学習目標	心理学の観点から、健康で豊かな人生を生きるために必要な環境調整や支援方法について、具体的に検討できるようになることを目標とする。		
9. アサイメント (宿題) 及びレポート課題	毎回の講義内で扱う事柄に関して、学術論文を読み込み、合理的な配慮とは何か、なぜそれが必要なのかについて、考えることを課題とする。また、論文を読む際は、その論文の問題点や課題なども併せて読み取り、文章として記述することを求める。		
10. 教科書・参考書・教材	【教科書】 セラピストのための子どもの発達ガイドブック ディー・C・レイ (編著) 小川裕美子・湯野貴子 (監訳) 誠信書房 【参考書】 問いからはじめる発達心理学 坂上裕子・山口智子・林創・中間玲子 有斐閣 教室の中のワーキングメモリ 河村暁 明治図書 子どものつまずきからわかる算数の教え方 平岩幹男 (監修) 奥塩渚 (著) 合同出版 これで書ける！サクサク作文サポート小学校編 阿部利彦 東洋館出版社 ちょっとしたことでうまくいく発達障害の人が上手に勉強するための本 安田祐輔 翔泳社 その他の参考書は適宜、講義内で提示する。		
11. 成績評価の規準と評定の方法	○成績評価の規準 毎回の講義後に課すレポート課題 (50 点)、講義内での課題への取り組み (30 点)、講義への出席状況 (20 点) の計 100 点満点で、評価を行う。 ○評定の方法 毎回の講義後に課すレポート課題 (50 点) : 毎回の講義後に、該当講義に関連するトピックや論文を読み込み、1200~1500 字程度のレポートの作成を求める。レポートの作成にあたり、文献引用などの作法、日本語としての文法や誤字脱字、主観的表現に偏重した文章になっていないか等を原点の対象とする。講義内での課題への取り組み (30 点) : 毎回の講義内において、ワークシートを配布し、そこに自身の考え等をまとめ、提出することを求める。1 回の講義につき 2 点の配点である。 講義への出席状況 (20 点) : 毎回の講義に出席することで加点される。なお、講義全体における欠席回数が 4 回以上になった場合、学則に定める単位習得条件に該当しないため、単位は認定されない。		
12. 受講生へのメッセージ	毎回、資料の作成と発表を行ってまいります。発表資料は日本語で作成し、発表に関しても日本語で実施してまいります。発達を考えることは、人間の普遍的な部分を理解すると共に、目の前の (あるいは周囲の) 人間理解のためにも非常に重要なことである。個々の発達の背景を考え、関わる必要があるのかについて、熟考する時間となってくれば幸いです。		
13. オフィスアワー	講義内で追って通達する。		
14. 学習の展開及び内容【テーマ、学習の目標、学習の内容、キーワード、学習の課題、学習する上でのポイント等】			
1—5. テーマ	乳幼児期から児童期の発達を理解する		
【学習の目標】 人の原点から児童期までの発達を概観し、個人内の要因と環境の要因が、いかに個々の発達へ影響を与えるかについて理解することを目標とする。 【学習の内容】 乳幼児期から児童期にかけの発達のつながりと、日常生活における具体的な場面とを関連づけて学習する。 【キーワード】 心の理論、社会的参照、時間的展望 【学習の課題】 対人相互作用において、こころの理論の発達がなぜ重要であるのか、こころの理論の発達に至るまでに、周囲の環境と子どもがどのように関わる様相が見られるのかについて理解する。その上で、子どもが周囲の環境と、どのように相互作用し、自己を作り上げていくのかに関する知識を身につける。 【参考文献】 問いからはじめる発達心理学 坂上裕子・山口智子・林創・中間玲子 有斐閣 【学習する上での留意点】 発達の連続性を常に念頭に置き、ごく一部の現象のみを切り取って、対象の発達の遅れや特定の環境要因と結びつけることのないように、知識の集積と関連づけを行うことに留意する必要がある。			
6—10. テーマ	乳幼児期から児童期における、心理的危機に関して、具体的に理解する		
【学習の目標】 乳幼児期から児童期に、こどもに起こりうる問題や課題について、事例を交えながら、その背景となる要因の相互作用について、具体性のある理解を深めることを目標とする。 【学習の内容】 乳幼児期から児童期の後半までに生じうる、発達上の危機について、具体的な事例を通し、その事例の理解に多様な側面が必要であることを学ぶ。不登校や虐待の原因をこく一部の要因に規定せず、包括的に支援を検討するために必要な知識			

とはどのようなものかを検討する。

【キーワード】 虐待、ネグレクト、自閉スペクトラム症、注意欠陥多動性障害、学習のつまずき、不登校

【学習の課題】 子どもに起こりうる問題や課題について、輻輳するさまざまな要因同志の関連や、固定の要因に着目されやすい背景などを検討できるような、理論的背景や知識を身に付ける。

【参考文献】 講義内で適宜提示する。

【学習する上での留意点】 とりあげる事例や、社会で起こっている出来事に関して、一つの要因をもとに解釈や理由づけを行わないよう、自身の確証バイアスに目を向け、内省を深めることを求める。

11—15. テーマ 乳児期から児童期の子どもに対する支援や配慮の方法について、具体的に理解する

【学習の目標】 目の前の子どもの状態や行動に対して、支援者がどのように働きかければ良いのかや、関われば良いのかについて、具体的な理解を深める。

【学習の内容】 教室で行える具体的な支援や環境調整について、実践例を交えながら、実施上の課題などについて学習する。

【キーワード】 学習支援、構造化、合理的配慮、応用行動分析

【学習の課題】 教室で行える支援について、どのような支援者であっても実施ができるような構造や手続きを検討すること。

【参考文献】 講義内で適宜提示する。

【学習する上での留意点】 支援を実施する際の具体的な手立ては、基本的に、誰がその支援方法を実行しても、対象に効果が見られることである。個々のパーソナリティや資質によらない、という部分に特に留意する。